

長士員二子彦薫孝郎弘司博大子遼子志郎尚治洋
委員隆委哲道嘉太俊武誠百矩義明正隆太郎常
集成祖馬上井谷東池岡米本花賀本井岡
增編赤有池石磯伊菊北久坂立塚平藤向室森吉岡
編輯赤有池石磯伊菊北久坂立塚平藤向室森吉岡
裝幀 向井周太郎

記号の力学(記号学研究15)

一九九五年三月三〇日——第一刷発行

編者 日本記号学会

発行者 古菅昇

発行所 東海大学出版会

〒151 東京都渋谷区富ヶ谷二二八-四

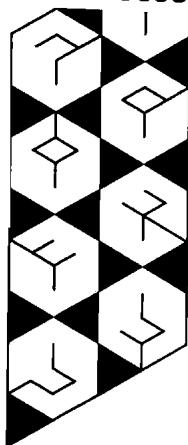
電話 〇三五四七八-〇八九一 振替 〇〇一〇〇一五十四六一四

印刷所 港北出版印刷

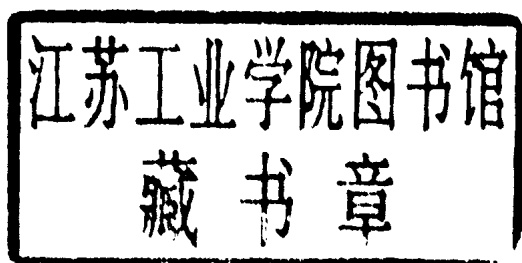
製本所 石津製本所

© 1995 by the Japanese Association for Semiotic Studies, Printed in Japan, ISBN4-486-01345-X

日文 701590983



Studia semiotica 15 • the journal of the Japanese association for semiotic studies 1995



語研

010

328

15

記号発生の力学

まえがきに代えて

久米 博

1

今号の『記号学研究』は「記号の力学」と題されている。意図するところは、記号の創造性や呪縛も含めて、記号活動の力動性を捉えようとするところにある。

巻頭の藤本隆志氏の論文「記号のデュナミス——記号の世界彫琢力と呪縛力」は、その力学（ダイナミクス）をアリストテレス的なデュナミス（力、能力）と受けとめ、記号の能力を問いかける。といってもそれは記号自体に潜在するデュナミスではなく、記号過程において働いているそれである。

「……記号をその対象の代理者たらしめる観点あるいは能力をもっているのは、……記号を解釈する誰かの〈心〉である点に注意しなくてはならないであろう」。

論者は記号過程において働きかける「慣習傾性」を重視する。その慣習の力（デュナミス）は極めて強力であるために、そこから記号の呪縛力が発してくる。「慣習の束縛力が記号使用傾性のもたらす呪縛力に直結している」のである。この呪縛力については、後でとりあげる上野千鶴子氏の「ジェンダーの呪縛」と比較してみることができよう。

記号のデュナミスを説明するのに、藤本氏はパースの記号過程理論へ訴えるが、船倉正憲氏の論文「記号の自己複製・増殖の力——『蛇性の姪』を例に」でも、冒頭で、パース理論にそって記号の力学を説明する。すなわち、物理学的に力とは粒子間の相互作用であるなら、転じて記号を粒子とみなせば、記号の力とは記号の相互作用

用である。ところで記号はその対象との関係にもとづく解釈によって存在するのであるから、記号の相互作用は解釈者の存在によって起こるものである。そこでパースの言う「解釈項」が重要な役割を果たすことになる。

「記号の力を説明するモデルはソシュールの直線的コミュニケーションではなくパースの三部構成的解釈過程になるだろう」。

つまりソシュールのモデルはシニフィアン、シニフィエの二項対立と等価交換にもとづき、両者の結合の原則は「恣意性」にあるのに対し、「パースは記号、対象、解釈項の三位一体の関係で解釈項の役割を基本に据えている」。

現代記号学の二大源泉としてのソシュールとパースの理論的対決は、つねにわが記号学会を舞台にしてなされてきたことは、私がこの「まえがき」でも毎回のよう指摘してきたところである。いくつかの二項対立にもとづくソシュールの記号理論は、パース的観点からすれば、いわゆる第二次性にとどまり、記号過程の力動性を欠くと見えよう。他方、ソシュールの観点に立つと、パースの記号論には言語プロパーについて正確で、特別なものは何ひとつ定義されていないという批判があろう。私自身は両理論の正面からの対決がなされることを期待して

いるが、今号では菅野盾樹氏の論文がこの主題に関連するので、あとで取りあげてみたい。

2

九四年度の記号学会大会のテーマは「呪縛する記号」であり、「記号に創造性はあるか」と「象徴とコミュニケーション——記号解釈のダイナミズム」という二つのシンポジウムと、一般研究発表のほか、上野千鶴子氏の特別講演「ジェンダーの呪縛」がおこなわれた。

その講演にもとづく上野氏の論文は、大会テーマにもっとも即した内容のものである。論旨明解で、どんなコメントも蛇足にすぎないが、私にとつて衝撃的であったのはマネーとタツカールの発見であった。すなわち「患者の〈性自認（ジェンダー・アイデンティティ）〉はその年齢までに強固に形成されており、それを変えるのは容易でないこと、もしその〈指導〉を強制すれば、患者はアイデンティティの危機から自殺にさえ追いこまれかねないこと」である。

そこから、ジェンダーはセックスに先行し、その拘束力のほうが強いこと、ジェンダーは人間の集団を男／女に分割する差異化そのものであるという帰結が導きだされる。

問題はその差異化にある。それは記号学的に言えば欠性対立の一種で、女はつねに男を標準とした差異をもった性として有徴化される。ジェンダーの差異化は中立的ではなく、文化的、政治的に差別をつくりだすものである。

前述の藤本論文では、記号の呪縛力の淵源を「慣習傾性」に求めたが、ジェンダーの呪縛では、ハビトウス形成の根源に、支配と被支配の政治的力学が働いていることになる。こうしてジェンダーの差異化発生の現場をとらえることを、われわれは記号学の課題として受けとめねばならないだろう。

3

菅野氏の論文「恣意性の神話」は、ソシユール言語学の中核をなす「恣意性の原理」が神話化され、それが記号探求にとつての最大の障害になっているとして、ソシユール派の理論に真向から挑戦する。ソシユールによると、言語記号は「アプリオリにいわば百パーセント恣意的」である。その恣意性は言語が自然的記号に対立する慣例的記号であるところから由来する。恣意性の神話を支えているのは自然／文化の対立図式である。しかし言語記号に自然的動機づけは皆無なのか。

菅野氏はソシユール記号学の特質も、問題点も、シニ

フィアン・シニフィエの記号の二重性の硬直性にあるとする。

「ソシユールの場合、この二重性はかたく凍りついて記号の温もりも生氣も失せている。記号過程が記号表現と記号内容とのすきまのない循環の中に閉じこめられてしまっているのである。それは記号の死にほかならない。ソシユールの体系では〈意味論〉の可能性は奪われている」。

その隘路を抜けたために論者は、その二重性にゆらぎをもちこみ、それを記号発生の見地に結びつけることを提唱し、その一例としてメルロー・ポンティの〈話すパロール〉の概念を参照し、認知科学的分析の成果を援用するのである。

前号での論文に続き、菅野氏の言語中心主義を排する舌鋒は鋭いが、私としてはこれに対する反論が寄せられるのを期待したい。

4

「記号の恣意性」(l'arbitraire du signe) は重要な問題を含んでいるので、以下に私見をつけ加えさせていただきたい。

ソシユールが恣意性を強調する第一の意図は、言語は

事物につけた名であるという「言語命名説」(a nomenclature)を否定することにあつたと思う。『クラテュロス』における慣習主義の主張は言語命名説に拠っており、そこでソシユールはシニフィアンとシニフィエの關係が事物と名の關係とは異なることを明示する必要があつた。しかし菅野氏が指摘するように、シニフィアンとシニフィエとが「表裏一体」である主張と、両者の關係が恣意性であるという主張には矛盾がある。また語る主体にとって両者の結びつきは必然的であつて、恣意的でないことはソシユールも認め、そこで恣意性の代りに「動機づけのない」(immotive)という語を用いた。同一言語内でも、たとえばvingt(二〇)のように動機づけがないものと、dix-neuf(一九)のように「相対的に動機づけられている」(relativement motive)ものが混在するとして、記号間の關係への道を開き、そこから横の恣意性という第二の恣意性が出てくる。

この二つの恣意性を説明するのに『一般言語学講義』では、周知のように、beufとox、moutonとsheep、muttonというように英仏語の比較を用いている。同一の個別言語内ではなく、異なる言語間の比較によって恣意性を説明する点が問題である。

バンヴェニストはソシユールの第一の恣意性を批判し

て、「シーニュの両項は恣意的であるところか、逆に必然的な結びつきである。beufなる概念は私の意識内ではdog」と言った。丸山圭三郎氏はこれに反論し、「バンヴェニストが恣意性を否定したのは、既成の構造としての個別言語内という視点からのみであり、換言すれば、社会制度としてのラングと、それを用いる個人の規制された意識という視点からのみである」(『ソシユールの思想』p.302)と述べている。

しかし語る主体にとって、言語とは何よりもまず、個別言語、母語であつて、どこにも存在しない普遍言語ではない。個人の意識において母語は特権的な位置を占めるのであり、母語においてシニフィアンとシニフィエの結びつきは必然的である。メルロ＝ポンティも「……ある言語の十分な意味はけつして他の言語には翻訳できない。われわれはいくつかの言語を話せるとしても、つねにその中の一つだけが、われわれの生きる言語であり続ける。一つの言語を完全に同化するには、その言語が表現する世界を引き受けねばならないだろうが、人はけつして二つの世界に同時に属することはないのだ」(『知覚の現象学』p.218)と言っている。

バベルの塔の逸話が例証しているのは、単一の言語へ

の人間の夢であるが、現実には地球上に存在するのは何千もの個別言語だけである。バンヴェニストの弟子でコレージュ・ド・フランス教授のクロード・アジェージュは『ことば人間——人文科学への言語学の寄与』の冒頭で、「種の単一性、言語の複数性」を主張する。つまり彼は人類の発生に関しては「人類単一祖先説」をとるとしても、言語に関しては「多元発生説」をとる。言語能力は単一でも、話されている言語はすべて異なる。プロト言語、母なる言語から、現在の個別言語が生まれたという単一言語の神話に、言語学者たちは多かれ少なかれ染まっているのではないか。ソシュールの言う「大衆」(masse)の話す個別言語を言語学は基盤にすべきであり、そこにおいて「シーニュの両項の結びつきは必然的」である。

「恣意的」に対立するのは、「必然的、自然的」であるが、実は必然的と自然的を分離、区別すべきではないか。言語体系は自然的ではないが必然的である。丸山圭三郎氏は恣意的を非自然的と言い換えているが、自然性を否定するために、必然性を排除してはなるまい。

ソシュールにおける自然性の否定は、言語命名説を排除するために要請されたのではないか。言語と言語外の現実との関係を切り離すために、ソシュールは語と対象と観念という伝統的な三項関係を廃して、あえてシニフィ

アンとシニフィエの二項関係を選びとった。言語から現実を捨象することによって、ソシュールは純粹に言語学的・領野を画定したのだ、とフランソワーズ・ガデは強調する。それによって言語は記号体系としての自律を獲得し、記号宇宙をつくりあげるが、その代償として失ったものも大きいことは、船倉氏や菅野氏が指摘するところである。

言語における自然的なものの否定は、ソシュールにおける言語起源論の排除に帰結する。ソシュールは「言語起源の問題は存在さえしない」と言いきる。しかしそのことが、言語起源ならぬ言語発生・の問題からソシュールを遠ざけてしまった。言語発生をオノマトペのように自然との類似からだけ類推するのではないとしても、そこにまったく自然的なもの、身体的なものとの関与を否認することはできないだろう。恣意性の名のもとに言語記号から一切の自然的なものを排し、記号宇宙に内閉することとは、言語を一種妄想のようなものにしかねない。そこで、言語発生・の力学を探ることが、シニフィアン／シニフィエ、ラング／パロール、自然／文化といった二項対立の硬直性から脱け出て、記号学を活性化することができると私は考える。

(日本記号学会会長)

記号の力学
目次

記号発生の力学 ■まえがきに代えて	久米博	5
-------------------	-----	---

1

記号のデュナミス ■記号の世界彫琢力と呪縛力	藤本隆志	17
------------------------	------	----

ジェンダーの呪縛	上野千鶴子	29
----------	-------	----

記号の自己複製・増殖の力 ■「蛇性の姪」を例に	船倉正憲	43
-------------------------	------	----

2 記号の解釈と創造性をめぐって―第14回大会シンポジウムから―

恣意性の神話	菅野盾樹	59
--------	------	----

狂乱する書記 ■ロマン派におけるセミオテクニクの始動	今泉文子	73
----------------------------	------	----

象徴とメタファーによる自己実現 ■詩人・北村透谷の場合	岡田隆彦	87
-----------------------------	------	----

記号解釈と創造性 ■楽譜解釈と発話解釈を中心に	西山佑司	99
-------------------------	------	----

「記号の創造性」と「知の体制」	増成隆士	111
-----------------	------	-----

3

時間の記号学的考察	青柳文司	117
-----------	------	-----

日米の野球報道にみる言語と文化の型

井上逸兵

129

北斎—関係性の芸術 ■ 作品中に認められる類似の関係に注目して

笹本純

143

4

環境記号論の構想

磯谷孝

161

5

第五回国際記号学会報告

平賀正子・高山真知子

197

■書評

ジョゼフ・キャンベルの神話学と生命

■ *Joseph Campbell on Myth & Mythology* edited by Richard L. Sartore

有馬道子

205

ISIS-Symmetry学会の機関誌 *Symmetry: Culture and Science* と記号論

デーネンユ・ナジ(Dénes Nagy)

211

編集後記

